

9月は「がん征圧月間」です。

知っておきたい、遺伝する婦人科がん



お尋ねしたのは

熊本大学大学院
生命科学研究部産科婦人科学

教授 片渕 秀隆 先生

【かたぶち・ひでたか】

1982年 熊本大学医学部卒業、熊本大学医学部附属病院産科婦人科研修医 1988年 熊本大学大学院医学研究科卒業 1993年 米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部病理学 2004年 熊本大学大学院婦人科学 教授 2009年 熊本大学医学部附属病院 副院長 2010年 (改組)同大学院産科婦人科学 教授(継続)、熊本県「私のカルテ」がん連携センター長(継続) 2012年 熊本大学医学部附属病院成育医療部門長(継続) 2015年 同副院長、日本学術振興会学術システムセンター 専門研究員 2016年 熊本大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター長(継続)、同生殖医療・がん連携センター長(継続) 2018年 同病院長特別補佐(継続)

日本産科婦人科学会産婦人科専門医
日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医
日本がん治療認定医機構がん治療認定医
日本女性医学会女性ヘルスケア暫定指導医

日本婦人科腫瘍学会 副理事長
日本臨床分子形態学会 理事長
日本婦人科がん検診学会 副理事長
JSAWI 代表
日本癌治療学会 理事
日本癌学会 評議員 ほか

2013年5月15日のニューヨーク・タイムズにハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリー氏による『私の医学的選択 my medical choice』が掲載され、さらにタイム誌でも大きく報道されました。その中で彼女は、自分の遺伝子に異常が見つかったことから、予防的に両側乳房の乳腺切除を受けたことを公表し、その2年後には、両側の卵巣と卵管の摘除も受けました。

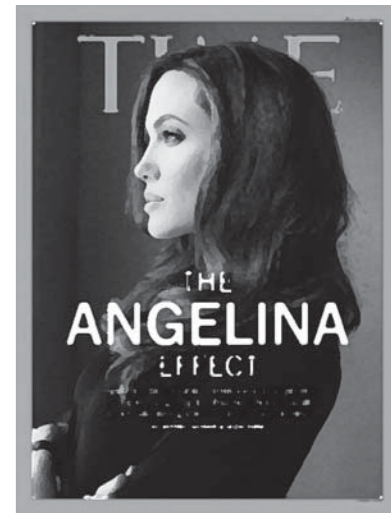
一般にがんの発生には、喫煙や飲酒の生活習慣、放射線や化学物質の外的環境、さらにはウイルスやホルモンなど多くの因子が関与しています。その一方で、親から子に遺伝する「遺伝性がん」の存在が知られ、がん全体の5~10%を占めています。婦人科での代表的な遺伝性がんとして、「遺伝性乳癌卵巣癌」、「リンチ症候群」、「ポイツ・ジェガース症候群」や「カウデン病」などがあります。中でも、アンジェリーナ・ジョリー氏の告白によって広く世間の知るところとなった「遺伝性乳癌卵巣癌(Hereditary Breast and/or Ovarian Cancer Syndrome: HBOC)」は最も頻度の高い遺伝性がんです。

遺伝性乳癌卵巣癌は、約25年前に発見されたBRCA1遺伝子あるいはBRCA2遺伝子の異常によって発症(常染色体劣性遺伝)します。日本人女性が生涯のうちに乳癌を発症するリスクは8%、卵巣癌は1%とされていますが、遺伝性乳癌卵巣癌の女性の場合、乳癌は41-90%、卵巣癌は8-62%と高率になります。

この2種類の遺伝子に異常があるかどうかの検査(遺伝学的検査)を受けることは可能です。しかし、最も大切なのは、どのような検査が行われるのか、診断された場合にがんの予防や治療法としてどのような選択肢があるのかについて、専門医による遺伝カウンセリングによって詳しい話を聞くことです。遺伝カウンセリングでは、患者さんの既往歴や家族歴などの聴き取りを詳細にして、関連するがんの発症についてリスクの評価を行います。そして、それぞれの患者さんの背景や状況を十分に配慮した上で、予防的にまだがんが発生していない乳腺あるいは卵巣・卵管の切除を検討する場合があります。

次の条件にあてはまる場合には、産婦人科や乳腺科、遺伝カウンセリングの相談ができる病院の受診が勧められています。

- 1.患者さん本人が若くして(50歳以下)乳癌を発症した場合
- 2.両側あるいは片側の複数箇所(多発性)に乳癌がみられた場合
- 3.家系内の血縁者に50歳以下で乳癌と診断された人がいた場合
- 4.家系内の血縁者に卵巣癌の人がいた場合
- 5.本人あるいは家系内の血縁者に乳癌に加え前立腺癌、膵臓癌や子宮体癌などが重複して発症した場合
- 6.家族内の血縁者に男性の乳癌の発症がみられた場合



※タイムス誌イメージ

がんの早期発見・治療に
努めましょう。